
魔法少女まどか マギカ 機械仕掛けの黄金郷

小神悠一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女まどか マギカ 機械仕掛けの黄金郷

【Nコード】

N7798X

【作者名】

小神悠一

【あらすじ】

たった一人の友達を救う為、数多の時間軸をかける魔法少女、曉美ほむら。何度も同じ時間を巻き戻し、そして繰り返してきた迷える少女は新たな時間軸へとたどり着いた。…だが、それは謎の生命体によって地球は危機に晒され、そして魔法は人間によって制御されたほむらの全く知らない世界であった。魔法少女でなくても魔法の使えるようになったその理想郷で、魔法少女達は何を見る…

プロローグ

——あなたと友達になれて、嬉しかった

——みんな… 死ぬしかないじゃない！ あなたも、私もッ！！

——バカな私を助けてあげて… くないかな

——彼女だけでは荷が重すぎたんだ

——あなたが歩いた昏い道に、望んだものに似た景色はあった？

——遅かれ早かれ結末は同じだよ

たった一人でたった一人の友と交わした「約束」を果たそうとする少女がいた。

少女の名前は暁美ほむら。絶望の象徴である魔女と戦う魔法少女であるほむらは、誰にも頼ることなく、孤高の戦いに明け暮れていた。

「……」

見慣れた病院のベッドと病室。その手には、ソウルジェムと呼ばれる宝石が握られている。

「私は…」

黒のロングヘアを靡かせ、少女——暁美ほむらは、うつむきながらひっそりと呟いた。

……何度時間を巻き戻しただろうか。

一人の少女との出会いをやり直すために魔法少女となったほむら。

…だが、その出会いは決してよい物とは呼べなかった。

とある時間軸では、少女と共に魔法少女として魔女と戦った。…しかし、その少女は魔女へと姿を変えてしまった。

とある時間軸では、魔女となる事を恐れた者の暴走により、他の魔法少女と共に果てた。

とある時間軸では、未来を受け入れられず絶望してきた少女達が団結し、ようやく、「約束」を果たすことができると思った矢先に、少女が殺されてしまった。

他の者に頼る事なく、すべての魔女を自分一人で片付け、そして今度こそ超弩級の大型魔女をこの手で倒す。倒すはずであった。しかし、何度も失敗し、時間を巻き戻す度に仲間であった魔法少女とだけではなく、約束を交わした少女との気持ちはズレていき、言葉も通じなくなってしまう。

どうしたら。どうすればいいのだろう。

ソウルジェムを見ながらほむらはずっと考えていた。

「キョーコ!」

「……」

隣から、少女の元気な声が聞こえた。

隣のベッドでは、緑色の髪の少女が元気よく飛び跳ねていた。小学生くらいだろうか、幼さがかなり残っている。

かつて通った時間軸にこんな少女がいた気がする。名前は知らないが、その時は佐倉杏子と共に行動をしていたような記憶がある。そんな事を思いだしながら、ほむらはこれからの事を再び考えるが、数秒後、その少女の発した言葉にほむらは啞然とした。

「キョーコ………杏子?」

佐倉杏子。かつてほむらの仲間として共に戦っていた魔法少女。好戦的な性格で仲間だった4人の魔法少女の中でも特に魔法少女

にふさわしい存在。

一体何が… と隣のベッドの緑色の髪の少女を見ると、病室のドアに覗き込む人影があった。

「まったく、心配したぞ」

「!？」

青い上着にショートパンツ。素足にブーツという少々奇抜な格好の赤いポニーテールの少女は、手に溢れるほどの林檎を詰め込んだ紙袋を持ちながら病室に入ってきた。

「どうして…」

それは佐倉杏子その人だった。

緑色の髪の少女に紙袋の林檎を渡す杏子の表情はとても晴れやかだった。

「どうして… あなたがここにいるの」

考えていた言葉が口に出てしまった。

本来ならば杏子はまだ、ほむらのいる病院や、見滝原町とは別の町にいるはずである。

それが、何故かこの病院にいる。しかも緑色の髪の少女と共に。

「…ゆま、こいつ、知り合いか？」

「うん、すつごく面白いおねえちゃんだよ」

どうやらこの世界での自分は、今隣にいるゆまと言う緑色の髪の少女と親しかつたらしいが、そんな事はどうでもいい。

「キョーコはほむらおねえちゃんと知り合いなの？」

「…いや、知らねえな。つつか、どういう事だ？ どうしてあたしがここにいるんだって…」

「…こちらの話よ、気にしないでいいわ」

ほむらは冷静に言い放つ。

「…そこまで言うんじゃ、何も聞かないよ。 …あたしは佐倉杏子、よろしく」

「…曉美ほむら」

「ゆまを可愛がってくれてたみたいだな。そのお礼だ」

「そう言つて杏子は、紙袋から林檎を一つ取りだした。
「食つかい？」」

プロローグ（後書き）

とうとう書いてしまいました、まどかマギカの二次創作。
様々な所からネタを取り込んだ代物ですが、どうか温かい目で見守
ってくださいよう、お願いいたします。

1話「マキナの名は伊達ではない」

「……」

退院してから数日後。見滝原町に到着したほむらは町を歩いていた。

これまでの時間軸とは何かが違う。杏子やゆまとの一件からそう確信したが、その何かがわからないために調査を行わなければならなかった。

だが、これまで見てきた見滝原町とは何の違いも見られず、何度も見てきた街並みのみが広がっていた。

「佐倉杏子の件以外に違う所が何もない… 私の思い過ごしだったのかしら…」

数時間歩き、結局調査は無駄足に終わった。これ以上歩いていても時間の無駄であると思い、引き返そうとした時だった。

「キヤアアアアアアッ!？」

何処からともなく甲高い女性の悲鳴が聞こえ、警報音がその場に鳴り響く。

「ま、マキナだ!」

「マキナ…?」

女性の悲鳴の聞こえる方向に走ると、そこには異形の生物が存在していた。

「何なの、これは…」

緑色の装甲に包まれた機械。

左手にはちゃんとした手が存在するが、右手は手ではなくナイフのような鋭い刃物となっており、その姿はまるで軍隊の尖兵のようである。

「これが… マキナ?」

「……」

人がほむら意外にいなくなったその戦場で、単眼のその冷たい目

は確実にほむらを見据えていた。

「なんだかよくわからないけど… やるしかないようね」

ほむらはポケットからソウルジェムを取り出し、少女から魔法少女へと姿を変える。その服装はセーラー服か何処かの制服を連想させられる。また、左手には盾のようなものが装着された。

「……」

「っ」

マキナはほむらに対して突撃してくるが、それを回避。

右手の自動式拳銃を構え、マキナに対して数発撃つ。

「……？」

しかし、攻撃が全く通じていないのか、銃弾を弾く金属音がするのみだった。

「火力が足りない… いや、これだけあれば木っ端な魔女くらいは…！」

さらに自動式拳銃で撃っていくが、マキナは怯むことなくほむらに向かって突撃の構えを見せ、走り出してくる。その見掛けに合わず、かなりの早足である。

「くっ、マキナの名は伊達ではないわね…」

マキナとはラテン語で「機械」の意味。

その見た目と名前通りの機械の装甲は伊達ではなく、単発の拳銃程度ではマキナの装甲を破ることができなかった。

「ならば…！」

ほむらは盾に力を込める。

カチッという時計の刻む音がすると、刃物を構えてくるマキナの動きが停止した。

時間停止。

ほむらの使用する魔法である。盾に内蔵されている砂時計の中の砂の流れを遮断することで、周囲の時間を止めるのである。

動けなくなつたマキナから数歩離れ、両手に自動式拳銃を持ち、

マキナの体の一点に向けて発砲していく。

「火力を集中……！」

いくら装甲が分厚いとはいえ、単発ではなく火力を一点に集中した銃撃ならばその装甲に傷を負わせることができる。

十数発の銃弾をマキナの体の前に固定し、拳銃を撃ちつくした所でほむらは再び盾に力を込める。

——停止解除——

時計の刻む音と共に、銃弾はマキナの装甲に全て命中。マキナは何が起こったのかわからず、呆気にとられていた。

銃弾に当たった場所には大きな穴が開き、その内部からは煙が吹き出ている。

「最後は中央を突破……！」

何処からともなく手榴弾を取り出し、ピンを抜く。

ほむらの存在に気づいたマキナは彼女に向かうが、ほむらは先ほど開けた穴に目掛け、手榴弾を投げ込む。

「！？？」

分厚い装甲の内部は脆弱であり、手榴弾の一撃によってマキナは爆発する。

その大きな爆発により、周囲にあった建物のガラスは割れ、電灯はなぎ倒されてしまった。

「……」

ほむらは変身を解き、顔についた煤を払いながら爆散したマキナの欠片を見つめた。

やはり、この時間軸はこれまで通過した時間軸とは何かが違っている。

杏子の件はともかくとして魔女の変わりに現れたマキナという名の謎の金属生命体。これは一体なんなのか。

「もう少し詳しく調べる必要があるか……」

調査を打ち切る予定だったがこれを撤回。更なる情報収集を行うためにほむらは再び歩き出した。

・・・

「マキナが現れた!？」

ほむらがマキナと戦闘を行っていた同時刻。

黄色い長髪を揺らす黄色い学生服の少女は逃げ惑う人々をかき分け、走っていた。学校の帰りなのか、左手には茶色い学生鞆を持ち、そしてその右手には携帯電話が握られている。

『うむ、あなたのいる場所から北北東に十数メートルの地点だ。そこからなら、あなたが一番近いのですね』

少女の携帯電話の相手の女性は落ち着いた声だった。

「その近くだったら正規軍も駐在してるのでは…?」

『知つてのとおりそこは町の中心地だ。そんな場所で戦車の砲弾が誤って周囲のビルに着弾した様を想像してみるといい』

「……」

女性の言葉に少女は何も言わず、ただ走っていた。

『とにかくその地点にいることは確かなのだ。確実に殲滅してくれよ?』

「ええ、わかってます!」

少女は携帯電話をしまい、ポケットから宝石のような物を取り出す。

それは、ほむらの持っているソウルジェムそのものであった。しかし、ほむらの持つソウルジェムは黒く輝いているが、少女の持つそれは黄色く輝いている。

「ふう、やるとしますか…!」

少女はソウルジェムに力を込め、ほむらと同じく魔法少女へと変

身する。

その後も、自身の武器であるマスケット銃を構えながら、マキナが現れたという場所へと走る。

「……」

だが、その場所にはマキナは存在せず、マキナの欠片らしき緑色の金属の破片がいたるところに転がっていた。

「何、これ……」

周囲の建物のガラスは割れ、電柱はなぎ倒され、まるでこの場所に大きな爆弾でも投げ込まれたのかというくらいに凄惨な状況だった。

『こちらエルシィ。現状を報告せよ』

耳に装着されている無線から先ほどの電話の相手の女性の声が聞こえる。

「ええっと、何と云うべきか、戦闘がすでに行われた後です……」

『なんだと？』

少女の言葉に、女性も驚きを隠せずにはいられなかった。

「軍が出動したという連絡は……」

「ないな。もし出動しているなら私の方にも連絡があるはずだ。戦闘が行われた後というが、そこは今どんな感じだ？」

少女は自分が今いる場所の状況を事細かに話した。その場所は煤にまみれ、火薬の臭いも凄まじく、思わずむせてしまうこともあった。

『なるほど、大体の状況は理解した』

「これからどうするんですか？」

『そこで戦闘を行った者を軍から洗い出してみる。個人でそれほどの火力を持つ者なんか軍隊以外で存在しないのだからな』

「…了解しました」

『わざわざ向かわせたのに無駄足にさせてすまなかったな。厳戒態勢を解除する』

「いいえ、これもお仕事ですから」

少女は変身を解き、再びその戦場となっていた場所を見つめていた。

2話「僕と契約して魔法少女になってよ」

自分の周りには、幾つも建物があつた。

しかし、それらは全て炎に包まれ、原形をとどめていない廃墟と化していた。

空は怪しく曇り、その上空には巨大な何かが浮かんでいる。ドレスを纏った人形のようなそれは、逆さに釣られ、ただ怪しく笑っていた。

「――！」

何処からともなく、声が聞こえてきた。

自分と同じ年齢くらいの少女だろうか。長い黒髪の少女は、たった一人で、巨大な何かと戦っていた。

瓦礫を掻い潜り、時に空を舞いながら、巨大な何かに対し、何処から持ち出したかわからない数々の銃火器を撃ち込んでいく。

しかし、巨大な何かに対しては全く効果が見られていない。それどころか、巨大な何かは黒髪の少女に対し、自身の発する黒い閃光を命中させるほどの力が残されていた。

「――！」

彼女の体はすでにボロボロであり、巨大な何かに対して劣勢なのは誰の目に見えても明らかだった。

「――彼女だけでは、荷が重すぎたんだ」

黒髪の少女の激戦をただ、立ち尽くして見ているしかなかった。

そんな自分に、白い生物が近づいてきた。猫とも、兎とも、カーバンクルとも区別のつかないその生物は、棒読みに言葉を発しながら、目の前の激戦を坦々と見ていた。

「そんな……」

爆音と共に、黒髪の少女は近くのビルに叩きつけられていた。叩

きつけられてもなお立ち上がり、ライフルを構え、涙目になりながらも巨大な何かに抗う。

「あんまりだよ… こんなのって、ないよ…！」

目の前の光景に対し、何もできない自分の非力さに、ただ呆然としていた。

どうしようもないのか。目の前の少女が、滅びに抗っているのに、自分は無力なのか。

「――、運命を変えたいかい？」

「えっ…」

生物の言葉に対し、呆氣に取られてしまう。

「この世界の何もかも、君が覆してしまえばいい。君には、それを可能にするほどの力が秘められている」

「本当に…？」

生物に、問う。非力な自分でも、何かをすることができる。

「私なんかが、本当に、何かができるの…？」

生物は頷き、自分の問いに答える。

「もちろんだよ。だから…」

「――！」

自分のいる場所の近くで、黒髪の少女は叫ぶ。しかし、少女の周りの地面は崩れ、それによる轟音は、少女の叫びをかき消してしまう。

「僕と契約して魔法少女になってよ！」

ガタン！

「あたっ … 夢才チ？」

目が覚めた。それと同時に、机に頭をぶつけてしまった。

周りを見渡すと、数組の男女が話をしていたり、仮眠を取っていたりと、何処にでもありそうな学校の教室の風景があった。

町立見滝原中学校。

この数年で、近代的な都市開発が進められたこの見滝原町では、人工的な景観の緑地や小川などが整備され、郊外には大規模な発電施設や工場なども存在する。

この見滝原中学校も、見滝原町において歴史の長い学校であるが、都市開発に便乗して大規模な改装が行われた。日本離れたその改装後の外見は、落成当時大きな話題を集めたという。

教室も壁がガラス張りとなっているなど、未来的な景観であった。「やっと目え覚ましたか、まどか」

「あなたが居眠りをなさるなんて珍しいですね」
しばらく教室を見回していると、自分の後ろから声がかかった。

美樹さやかと志築仁美。青髪の活発そうな少女は、仮眠を取っていた少女の背中をひじで突いてきた。

「うん、おはよう、さやかちゃん、仁美ちゃん」

「おはようっておいおい、ここは学校だぞ？」

「あ、そうだったね」

少女は自分の発言とさやかのツツコミに苦笑した。

鹿目まどか。見滝原中学校に通うごく普通のどこにでもいそうな中学2年生。とても優しい父親、3歳になる可愛らしい弟との3人暮らし。

「皆さん、今日は先生から大事なお話があります。心して聞くように」

ショートホームルームの時間。

まどか達のクラスの担任である早乙女和子は真剣な面持ちであり、その為に教室もピリツとした空気が張り詰める。

「いいですか女子の皆さん！」

早乙女和子は机を叩きつけながら叫ぶ。

「卵の焼き加減にケチつけるような男とは交際しないように！　そして男子は！」

指示棒で適当な男子を数人指しながら叫ぶ。

「くれぐれもそういう大人にならないように！　…先生が言いたいのはそれだけです」

目に涙を浮かべながら、早乙女和子は言う。

「あちゃー、今回の相手もダメだったのか…」

「だね…」

さやかとまどかは苦笑。

彼女らの担任の早乙女和子はかなりの美人なのだが、彼氏と長続きしないことが悩みであり、大抵は他の人から見ればしょうもない理由で別れていた。

「あーあと、転校生紹介しまーす」

早乙女和子は先ほどまで涙目だったがそれを素早く切り替える。

「いやいや、そっちが先だろうとさやか達は内心突っ込む。自分を紹介される前に担任のしょうもない話を聞かされてなんとも言えない気持ちなのだろうかなあとそんなことを考えていた。

「暁美さん、入ってきてー」

「…はい」

教室のドアが開き、一人の少女が入ってくる。

「……えっ」

長い黒髪の、可憐という言葉が似合う少女。

「うわっ、すっげー美人じゃん」

さやかは率直な感想を述べていたが、まどかはただ驚くしか無い。さつき見ていた夢。その夢に出てきた少女と瓜二つである。

「あの人… 夢に出てきた…？」

「…暁美ほむらです。よろしくお願いします」

「ハイみんな、仲良くしてあげてくださいねー」

黒髪の少女、暁美ほむらはクラスメイトの拍手によって迎えられ

る。

一方のほむらはただ、まどかをじっと見据えていた。

「!？」

「ね、ねえ… あの子、こっちにガン飛ばしてこなかった？」

さやかは後ろから小さな声で声をかける。

「えっ!？ そ、そうかな？ …… まさか、ね…」

その後、クラスは転校生である曉美ほむらに注目していた。

一部の女子達は、ほむらに対して前はどんな学校にいたかとか、部活は何をやっていたかななどの質問攻めを行っていたが、ほむらは質問に坦々と答えていく。

「すごいな…」

まどか達はほむらのそんな坦々とした様子にただ感心するしかなかった。

「…ごめんなさい」

ほむらは立ち上がるが、片手で頭を抱えていた

「ちよつと緊張しちゃったみたいで気分が悪くて… 保健室に行かせてもらえるかしら？」

「大丈夫？ 連れてってあげるよ？」

先ほどまで質問を行っていた女子は言うが、ほむらはそれを制した。

「いえ、係の人をお願いするわ。… 鹿目さん」

「へっ!？」

「あなた、保険委員よね。保健室、連れてってもらえる？」

「う、うん…」

まどかは席を立ち、ほむらと共に保健室へと向かう。

「あの子、転校生？」

「すごいきれいだねー」

「す、すげえ…」

廊下での会話を尻目に、ほむらは坦々とまどかの前を歩いていた。まどかは、どうして転校してきたばかりで軽い自己紹介してないにもかかわらず、自分が保険委員だとわかったのかがわからなかった。

しばらく歩くと、こっちよね？とほむらは保健室の方向を指差していたが、ただ頷くことしかできなかった。

これでは、なんだか自分が案内されているみたいである。通常ならば、自分がほむらを先導する立場であるはずなのだが…

「あ、あの、曉美さん…？」

「ほむらでいいわ。何？」

ほむらはじつと見つめていた。

こつもしつかりとした目で見られてしまうと、何故自分が保険委員であることや、保健室の場所を知っているのかと聞くことができない。

「あ、あの、えっと…」

「…鹿目まどか」

「は、はひっ！」

いきなり名前を呼ばれ、つい萎縮してしまう。その声はとても低く、恐怖すら感じてしまった。

「あなた、家族や友達の事、大切だと思ってる？」

「え…」

ほむらの唐突な質問に、困惑してしまう。

「どうなの？」

「…もちろん、大切だと思ってるよ？ 家族も友達も、みんな大好きで… とても、大事な人だと思ってる」

「……」

頭の中で上手く言葉が出てこない為に、話し方があやふやとなってしまう。

だが目の前にいる少女は顔色一つ変えていない。

「…そう、なら、忠告しておくわ」

「えっ…」

「その気持ちが本当なら、これだけは守って。……自分を換えようなんて思ってはダメよ。でなければ…あなたの大切なものを、すべて失ってしまう」

「ほむらちゃん…?」

まどかには、ほむらの言っている事がわからなかった。一体、この少女は何者なのだろうか。

「鹿目さん、ありがとう。もう一人で行けるわ」

そう言って、ほむらは保健室へと入って行ってしまった。

…そして、その場に残されたまどかは、ひっそりと呟いた。

「私の… 私の、大切なものは…」

3話「夢の中で逢った、ような……」

「――では、次のニュースです」

「金属生命体マキナが、群馬県見滝原町に現れたと先日未明、M・D・Cより発表がありました」

「マキナは数年前より地球に現れるようになった、全てが謎に包まれている金属生命体で、様々な固体があることが確認されています」

「現れる場所などに規則性がなく、見滝原町の管轄であるM・D・C・群馬支部では、厳重体制を敷く意向との事です」

・・・

「夢の中で逢った、ような…… そんな感じがするんだ」

まどかは先ほどのほむらとの廊下でのやり取りを話していた。

「……」

「……」

「あ、あの……」

放課後のとあるファストフード店。

さやかと仁美は、呆然としていた。先ほどまで、まどかの話していた言葉に、ただ何も言えなかった。

だが、その数秒後にさやかは大きな声で笑い出した。

「ちょ……っ、まどか、何それマジで！？ あっはっはっは！」

「い、言うんじゃない……」

まどかは2人に話すべきではなかったと後悔の念に押され、一方の仁美もさやかに対して笑いすぎなのでは……と呆れの表情を浮かべていた。

「いやあ、悪い悪い。だってさ……」

さやかは笑いを堪え、羨ましそうに、反面呆れながらも言う。

「まどかの前に現れた文武両道才色兼備なミステリアス転校生曉美ほむら！ 実は夢の中で一度会っていた… ってか！？ しかも向こうも面識あるかのような素振りだったと！」

さやかはさらに続ける。

「二人はアレだ、前世か何かで結ばれた仲だったんだ… これぞ、宇宙の神秘！」

「うつつ、からかわないでよさやかちゃん！」

さやかあまりにもな言葉にまどかは思わず赤面してしまう。

「…あ、ごめんなさい。お先に失礼しますわ」

仁美は時計を見ながら申し訳なさそうに呟き、席を立った。

「仁美ちゃん、今日も習い事？」

「ピアノに日本舞踊に茶道だっけ？ 毎日ハードだよなあ…」

「じゃあ、また明日」

「ええ。鹿目さん、美樹さん、ごきげんよう」

仁美は帰ってしまった。

一方の残されたさやかとまどかも立ち上がる。

「じゃあ、私たちも帰る？」

「ああまどか、CD買ってもいい？」

「あ、うん、いつものだね」

・・・

「…先日の戦闘についてわかったことはありますか？」

とある商店街。

黄色い髪を揺らす少女——巴マミは、携帯電話を持ちながら周辺を歩いていた。

本来ならばマミは、学校が終わった後は彼女の友人らと下校する

予定だった。

しかし、先日マキナがマミの住む見滝原町に現れた事により、マミは見滝原町の見回りを行い、もしマキナが現れた場合には、魔法少女として迅速に対応しなければならなかった。

彼女の友人達は、いつもは誘いに乗るマミがその誘いを断った為に疑問の表情を浮かべていたが、それに対してマミはただ笑うしかなかった。

『いや、何も明らかににはなっていないな』

「……」

『……』

「……」

『……』

「……」

『……』

「……それだけですか？」

『そうだが何か？』

電話の相手の女性はマイペースである。

平時マイペースなノリの彼女に対してマミは何も言わなかった。

彼女と話をする際はいつもこんな調子である。

「せめて、使用した武器の断定とかは……」

『まあ、ダイナマイトかそれに順ずるものであることは間違いないだろう。そうでなければビルのガラスを割るほどの爆発なんて起こせるはずがない』

「それは……そうですね……」

『とにかくこちらとしても何者が使用したかは鋭意調査中だ。わかつた事があれば、すぐに連絡を入れる』

「わかりました」

『……ああそうだ、別の支部はこちらに2人の魔法少女を新たに派遣する事を決めたらしい』

「私以外の魔法少女……ですか？」

『ああ、そのうちの1人はあなたの知る人物だ』
「…期待しないでお願いします」
『おやおや、連れないねえ…』

・
・
・

~~~~~  
♪

CDシヨップ。

まどかはヘッドホンを装着して音楽を聴いているが、さやかは店にあるCDをあれでもないこれでもないを探していた。

しばらくはそんなのかな日常が続いていたが、外から何かが爆発する音が聞こえた。まどかとさやか、CDシヨップにいた人達は皆、一体何が起こったのかと外に出、爆発音の起こった大通りを見ていた。

「ちよつ、何、あれ!？」

そこには、無骨な装甲に包まれた機械が存在していた。左肩や体の箇所から歯車が露出し、その歯車はギイギイと鈍い音を響かせながら回転している。

「も、もしかしてアレがニュースで言ってた、マキナ…?」

「……」

マキナはその無機質な目で周囲を見渡し、右腕と一体化しているリボルバー式の拳銃を構えると、無差別に乱射を開始した。

「きゃあああつ!」

「撃ってきた!？」

「に、逃げる!」

「おい、俺が先だ!」

「ぐあああつ!」

その場にいた人達はパニックに陥っていた。

我先にとマキナの銃撃から逃れようと後退していくが、マキナは乱射を続け、その場にいた人達の一部はマキナによって射殺されていく。

平穏な日常が流れていたその場は、一瞬で地獄と化した。

その場は、マキナによつて一瞬で命を落としてしまった犠牲者の遺体が十数に涉つて横たわり、周囲の看板などはその血によって紅く染められていた。

「おいまどか、何やってんだ！ 私達も逃げないと――」

「こ、こんなのって……」

その場にいた人たちが逃げ惑う中、まどかはただ立ち尽くしていた。

今まで自分達が過ごしていた日常。それが、たった一つのイレギュラーな存在により、脆くも崩れ去っていく。

「……………」

周辺に人がいなくなった為か、マキナは銃を建物に向かって撃ち始めた。

弾切れを起こすことを知らないその銃を止める者は誰もおらず、銃撃の対象となった建物からは黒い煙が延々と噴出していた。

「……………」

銃声のみがその場に響き渡る。

「こんなのって、ないよ……！」

先ほど見ていた夢と同じように叫んでしまう。

「……………」

「げっ、気づかれたぞ！ おいまどか！」

まどかの叫び声に気づいたのか、マキナは右手の銃をまどかとさやかに向け、前進してくる。

さやかはまどかを動かそうと何度もゆするが、まどかはその場から動けない。刻一刻と近づいてくるマキナの脅威に、さやかは友人を放っておく事もできず、ただ焦っていた。

「ちつくしよう、こんな所で死ぬなんて冗談じゃない…　　ってわあ、こっち来んな！　来るなよお！」

さやかは毒づくがその光景に代わり映えはしない。

ここまでか…　と思っただ矢先の事。

「！？」

何処からともなく黄色いリボンが現れ、マキナを拘束していく。

一瞬の出来事であり、さやかは一体何が起こったのか理解できなかった。

「な、何が起こった…？」

「え…？」

うつむいていたまどかは顔を上げ、目の前でマキナがリボンによって拘束されていく様子を見ていた。

「マキナを発見…　速やかに掃討するわ！」

何処かから声が聞こえた。

「危ない所だったわね。でも、もう大丈夫！」

黄色い髪の少女がいた。

…だが、その格好は普通ではない。黄と茶を基調とした、西洋の何処かのお祭りで見られていそうな服と茶色い帽子。スカートはやや短く、腹部に巻かれたコルセットのような物によって胸は大きく強調されていた。

「えっと…」

「どちら様…？」

まどかとさやかは突然現れた少女の存在に唖然としているが、一方の少女は何処かから小さな大砲を召喚し、マキナに向けて発砲していく

「すぐに終わらせてあげる！」

数回の発砲と同時にマキナは煙を吹き、爆発した。

「うわあ…」

「す、すげえ…」

迅速にマキナとの戦闘を追えた少女のその光景に、まどかとほむ

らは哑然としていた。

「あなた達、怪我は無い？」

「は、はい……」

「あ、ありがとうございます！ ……あの、あなたは？」

「ごめんなさい、自己紹介がまだだったわね」

少女は変身を解く。

「私は巴マミ。あなた達と同じく、見滝原中の生徒」

「変身した！？ いや、変身が解けた！？」

「…そして、M・D・C・に所属する魔法少女。よろしくね」

少女こと巴マミは微笑み、さやかは驚いていた。

「い、いえ、こちらこそ、よろしく願います！」

「あ、あの… M・D・C・って、なんですか？」

さやかは驚いたままだったが、まどかは冷静にマミに対して質問をした。

「んー、そうね… 短い言葉だと説明がしにくいわね…」

マミは考える仕草を取っていた。

「これからM・D・C・に行つて私の上司に報告しなければならないんだけど… あなた達も一緒に来る？」

「え……」

「いいんですか？ 私達、部外者なのに……」

「ええ、私の上司はある程度の事には寛容だから大丈夫よ。行きましょう」

「は、はい！」

まどかとさやかは、マミに先導されて歩き出した。

「……」

そんなまどか達の様子を、建物の影から見る者がいた。

マミとは違い、セーラー服の様な格好の魔法少女、暁美ほむらは先ほどのマミ達の会話を聞き逃してはいなかった。

「キユウベえの代わりに存在するM・D・C…調べてみる必要がありそうね」

ほむらはまどか達に気づかれないように、その後ろを歩き出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7798x/>

---

魔法少女まどか マギカ 機械仕掛けの黄金郷

2011年11月16日03時26分発行